

## 「ファウヌスの家」の装飾プログラム研究

### ——《アレクサンドロス・モザイク》と《魚介類のモザイク》を中心に

東北大学 野々瀬 真理

「ファウヌスの家」は、ヘレニズムの宮殿建築である列柱付きの中庭（ペリステリウム）と、古代ローマの邸宅に特徴的な天窓付き広間（アトリウム）を持つ、折衷様式の邸宅である。前3世紀に工事が始まり広間と中庭が設けられ、前1世紀ごろに壮麗な床モザイクが敷かれた部屋が、二つの空間と隣接して設置された。広間に隣接した部屋には、魚介類や鳥類、酒を司る精霊など、饗宴を想起させるモザイクが敷かれた。一方中庭に面した部屋には、巨大な戦闘図が表されたモザイクが敷かれた。この戦闘図は「イッソスの戦い」の一場面を表していると考えられており、描かれた将軍に因んで《アレクサンドロス・モザイク》と呼ばれている（A. Cohen, 1997）。これらの作品は、邸宅が噴火で埋まる後79年まで維持され、現在ではナポリ国立考古学博物館に所蔵されている。

先行研究では、「ファウヌスの家」の広間の饗宴主題のモザイクと中庭の《アレクサンドロス・モザイク》は、それぞれ客人に向けた装飾、家族や友人に向けた装飾として分けて考えられてきた（F. Pesando, 1996）。これは、広間（アトリウム）と中庭（ペリステリウム）を持つ古代ローマの一般的な邸宅において、邸宅の主人の被保護者（クリエンテラ）などの客人は広間まで、親しい友人は中庭など家の奥まで入ることを許されたと考えられているためである（R. Ling, 2005）。しかし、「ファウヌスの家」においては、広間の周囲の部屋のひとつが、中庭に通じる通路の役割を果たしている。この部屋の発掘は19世紀に行われ、その調査記録が詳細に残っていないことから、中庭への通路がどの時点で設置されたのかは検証されてこなかったが、もし前1世紀までに設置されていた場合、《アレクサンドロス・モザイク》は饗宴主題のモザイクと併せて、被保護者などの客人をもてなすために設置された可能性が高い。また、通路となった部屋には《魚介類のモザイク》が敷かれており、このモチーフはポンペイの他の邸宅において、アレクサンドロス大王に関連する図像が表された部屋の、入り口付近の壁に表されていることが確認されている（J. Pollitt, 1986）。

本発表では、《アレクサンドロス・モザイク》と、広間から中庭への通路に設置されていた《魚介類のモザイク》を中心に、「ファウヌスの家」の装飾プログラムを再考する。まず、中庭への通路の設置年代を考察し、《アレクサンドロス・モザイク》が設置された当時、客人がこのモザイクを見るために広間から中庭に入ることができたという仮説を検証する。次に古代の文献の記述から、《アレクサンドロス・モザイク》と《魚介類のモザイク》のモチーフに見られるヘレニズム美術の影響を考察する。さらに、2つのモザイクを「ウェッティの家」などの壁画装飾と比較し、紀元前1世紀以降のポンペイにおける戦闘主題と饗宴主題の受容を考察することで、「ファウヌスの家」の通時的な装飾プログラムの構築を試みる。